



もっと体を動かそう！親子で一緒に楽しもう！



全国国公立幼稚園・こども園長会

もくじ

はじめに

親子で一緒に、日々の遊びや生活の中で…

全国国公立幼稚園・こども園長会 会長 新山 裕之 …… 1

I 事業の概要 …… 2

- 1 事業の趣旨 …… 2
- 2 事業の経過 …… 2

II 調査結果及び1年次全国キャンペーン・研修会の成果 …… 3

- 1 「子どもの体力・運動能力に関する実態調査と意識についての調査」から分かったこと …… 3
- 2 1年次の全国キャンペーン・研修会の成果と課題 …… 3

III 国公幼からの提言 …… 4

- 提言 1 遊びや生活の中で、より多様な動きを体験できるように豊かな遊びをしよう …… 4
- 提言 2 幼児期に体を動かす経験の大切さを保護者と共有し、親子で触れ合い体を動かすことを楽しもう …… 4
- 提言 3 地域との関わりを広げ、親子で多様な体の動きができるように発信しよう …… 4

IV 提言の実践 …… 5

- 1 実践について …… 5
- 2 もっと体を動かそう!親子で一緒に楽しもう!
「親子で楽しく^{はなまる}チャレンジ!」の家庭での取り組み …… 7
- 3 提言の実践から明らかになったこと …… 8

V 2年次の全国キャンペーン・研修会 …… 9

- 1 各ブロックの報告 …… 9
 - ① 東北 北海道ブロック …… 9
 - ② 関東 甲信越ブロック …… 10
 - ③ 東海 北陸ブロック …… 10
 - ④ 近畿ブロック …… 11
 - ⑤ 中国ブロック …… 11
 - ⑥ 四国ブロック …… 12
 - ⑦ 九州ブロック …… 12
- 2 全国キャンペーン・研修会の成果 …… 13

VI まとめ

遊びや生活を通して「子どもの体力・運動能力を向上」させるための幼稚園・こども園の役割

特別事業委員会 委員長 泉 雅美 …… 14

VII 寄稿文

幼児期の体力・運動能力について / 親子で一緒に体を動かすことの重要性

東京学芸大学 教授 吉田 伊津美 …… 15

はじめに

親子で一緒に、日々の遊びや生活の中で…

全国国公立幼稚園・こども園長会 会長 新山 裕之

全国国公立幼稚園・こども園長会では、子どもたちの体力低下に対する問題意識から、10年前に子どもたちの体力や運動能力について調査研究を行いました。それから10年を経て、平成29年度、子どもの体力・運動能力に関する実態や教師や保護者の意識について、公益財団法人 日本教育公務員弘済会より日教弘本部教育団体研究助成金の助成を受けて、改めて調査研究を行いました。

その結果、家庭では運動系の習い事をさせる家庭が約2割あり、同じくらいの割合で、公園などで子どもと一緒に遊ぶ保護者がいることが分かりました。園が呼び掛けて親子で体を動かす機会が減少してきていること、しかし、そのような機会に親子活動を体験することで、子どもの発達についての理解が深まったり、親子の触れ合いを意識して実践する保護者が増えたりすることも分かりました。

今年度作成したリーフレット「親子で楽しく^{はなまる}チャレンジ」では、運動という視点で一日の生活をデザインするという行動化を促しています。頭では理解できていても行動に移すことは簡単ではありません。「親子で一緒にする」機会をつくる支援こそが、今の幼稚園・こども園の果たすべき役割なのかもしれません。私たちが大事にしていることは、この「親子で一緒にする」ことと、「誰でもどこでもできる」取り組みを習慣化させることです。園庭開放の時間に、親子で縄跳びをしたり、買い物の荷物を持って階段を昇り降りしたりすることでも、体を動かす経験は十分にでき、そのことを通じて親子のコミュニケーションを深めることもできるのです。

調査研究と同じテーマで、全国の7ブロックで「全国キャンペーン・研修会」も進めています。ただし、それぞれの会場に集まって実際に体験できる人数には限りがあります。そこで、この報告書では、各ブロックの「全国キャンペーン・研修会」の様子を具体的にお伝えし、リーフレットの活用の仕方などもご紹介します。全国国公立幼稚園・こども園長会の目玉事業の一つである特別事業の内容をより多くの皆さんにお伝えし、多くの園や地域でご活用いただければ幸いです。

終わりにになりましたが、2年間にわたって本事業のご指導をいただき、本誌面にも寄稿文をお寄せいただいた 東京学芸大学教授 吉田伊津美先生、全国キャンペーン・研修会の開催や報告書の作成などにご協力いただいた各ブロック会長様、開催地の園長先生、先生方、保護者の皆様はじめ、関係の皆様は厚く御礼申し上げます。

I

事業の概要

遊びや生活を通して、子どもの体力・運動能力を向上させる調査研究
 — もっと体を動かそう！親子で一緒に楽しもう！ —

1 事業の趣旨

全国国公立幼稚園・こども園長会特別事業委員会（以下「本会」という）では、平成19、20年度の2年間にわたり、「幼児の生活リズムを整え、体力向上を目指すプログラムに関する調査研究」を行い、親子参加型のキャンペーン・研修会を実施した。また、リーフレットを作成し、行動化を促すプログラムとして活用を図り全国各地で大きな成果をあげた。

しかし、平成24年3月、文部科学省が、すべての幼児が十分に体を動かす機会に恵まれているとは言えない現状があるとして「幼児期運動指針」を策定した。その後も、幼児を取り巻く生活環境は著しく変化し、「子どもの体力・運動能力の向上」にふさわしい環境が整っているとは言い難い状況となっている。

そこで本会では、前回の調査から約10年を経た現在、改めて実態調査を行い、遊びや生活を通じた親子の触れ合いを広げ、「子どもの体力・運動能力を向上」させていくことを目指し、調査研究を進めていくこととした。

2 事業の経過

「子どもの体力・運動能力に関する実態調査」を行い、親子の関わり的重要性を発信しながら、遊びや生活を通して、「子どもの体力・運動能力を向上」させることをねらいとし、2年間の調査研究を行う。

1年次

(平成29年度)

- 平成19、20年度実施の「幼児の生活リズムを整え、体力向上を目指すプログラムに関する調査研究」から10年を経た今、改めて園や家庭における「子どもの体力・運動能力に関する実態調査」を実施し、幼児期にふさわしい遊びや生活を通して、「子どもの体力・運動能力の向上」を図るための環境を考える。
- 「親子の触れ合いを通して、体を動かす楽しさと大切さを体験する全国キャンペーン・研修会」を全国7ブロックで実施し、親子の触れ合いを広げ、関わりを楽しみながら、園、家庭、地域が連携して「子どもの体力・運動能力の向上」を図ることができるよう意識を高める。
- 1年次の事業についてリーフレットを作成し、園、家庭、地域において「子どもの体力・運動能力を向上」させるための提言をまとめ、全国国公立幼稚園・こども園並びに関係諸機関へ配布する。

2年次

(平成30年度)

- 1年次の調査結果や分析・考察を生かし、幼児にとって望ましい親子の関わりについて明らかにし、遊びや生活を通して「子どもの体力・運動能力の向上」を図るための在り方を探る。
- 親子体験型リーフレット「親子で楽しく^{はなまる}チャレンジ！」を作成し、親子の触れ合いを通して、体力・運動能力の向上を図ることにつながるよう、各家庭での活用を期待し、全国国公立幼稚園・こども園並びに関係諸機関へ配布する。
- 親子の関わり的重要性について発信し、地域の特性を生かしながら、体を動かす楽しさを味わえるよう、その行動化を促す「親子の触れ合いを通して、体を動かす楽しさと大切さを体験する全国キャンペーン・研修会」を全国7ブロックで実施する。
- 提言に基づいた実践事例や「親子で楽しく^{はなまる}チャレンジ！」の実践を含め、2年間の調査研究を報告書としてまとめ、全国国公立幼稚園・こども園並びに関係諸機関へ配布する。

II

調査結果及び1年次 全国キャンペーン・研修会の成果

1 「子どもの体力・運動能力に関する実態調査と意識についての調査」から分かったこと

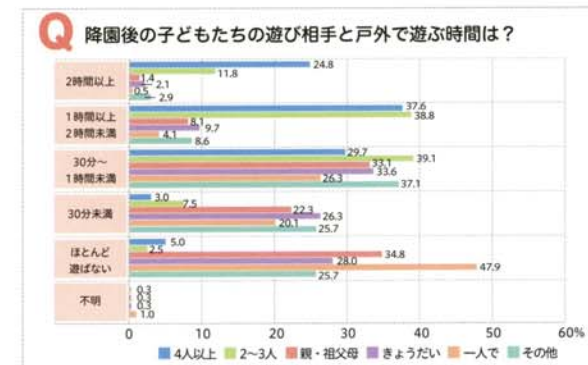
(1) アンケート調査の概要

- 調査対象園：全国の幼稚園・こども園数の比率に準じて選定
- 回答者数：保護者2,043名 教諭684名 調査実施期間：平成29年9月

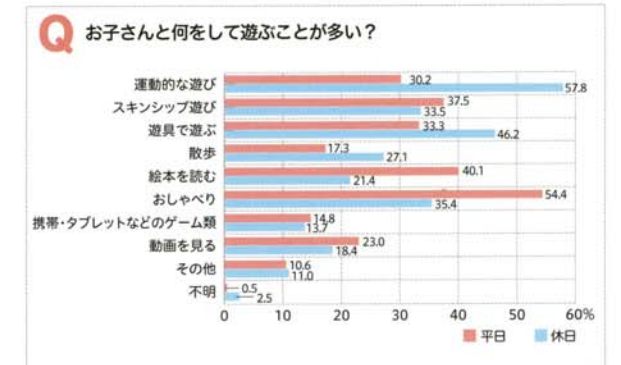
(2) 調査結果からの分析の概要

子どもたちの平日と休日の過ごし方

(子どもの実態) 降園後の子どもの遊び相手と戸外で遊ぶ時間



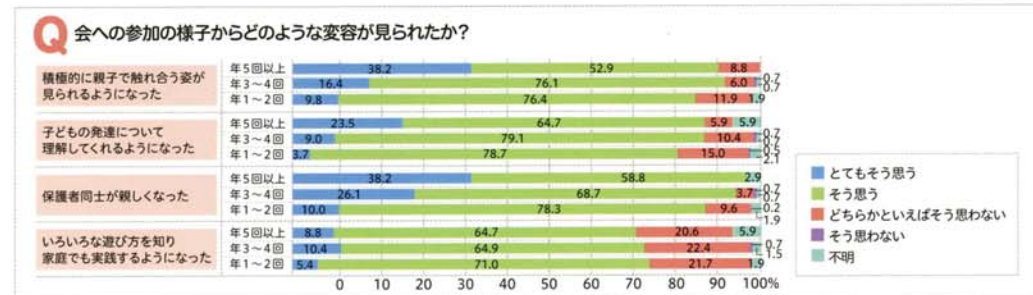
(保護者の実態) 親子の平日と休日の遊び



平日、降園後の子どもたちの戸外遊びについては、友達と一緒に30分～2時間以上遊ぶが、親・祖父母、きょうだい、一人となると少ない。保護者の実態としては、平日は体を動かすことが少ないが、休日は運動的な遊びや遊具で遊ぶなど、親子で触れ合って体を動かして遊んでいる実態がうかがえる。

保護者への園からの働き掛けの実態と成果

親子で体を動かす行事(機会)の実施回数と参加後の保護者の変容



園で「親子で体を動かす活動」の実施回数が多いほど「積極的に親子で触れ合う姿が見られるようになった」「子どもの発達について理解してくれるようになった」「保護者同士が親しくなった」の項目で「とてもそう思う」という回答が多くなっている。実施回数が多いほど、その成果があがっていくことが分かる。

2 1年次の全国キャンペーン・研修会の成果と課題

全国キャンペーン・研修会では、遊びや生活を通して親子の触れ合いを広げ、一緒に体を動かす遊びや体操などに取り組んだ。その結果、次のような成果と課題があった。

成果 保護者からは「自分自身も楽しみ、親子の触れ合いの大切さを感じた」「身近な素材を使って家庭でも簡単にできる運動遊びを知ることができ、今後も行いたい」「幼児期に全身を使って遊ぶことやいろいろな動きを経験することが大切だと分かった」という意見が出された。このことから、教諭の「保護者に子どもと一緒に体を動かす楽しさや大切さを伝えたい」という願いが、しっかり受け止められたと捉えられる。

課題 遊びや生活を通して、親子で体を動かして遊ぶことや、親子の関わり的重要性を繰り返し発信していく必要があると同時に、体力・運動能力を高めるために、地域の人材や特性を生かした環境を意図的・計画的に構成していく必要がある。

III

国公幼からの提言

1年次の調査及び全国キャンペーン・研修会を基に、幼稚園・こども園や家庭、地域において「子どもの体力・運動能力を向上」させるために、以下の提言をする。

提言1 遊びや生活の中で、より多様な動きを経験できるように豊かな遊びをしよう

幼児は、自ら環境に関わり、楽しく夢中になって体を動かして遊ぶことで、様々な体の動きを経験できるようになります。そして、それらの経験を積み重ねることによって、心身の健やかな発達が促され、さらに体を動かして遊ぶ意欲が育ちます。そのために、幼稚園・こども園では、体を動かす機会を計画的・積極的につくり、環境の構成や援助を工夫したりして、幼児がしたい遊びを十分に楽しみながら、多様な動きを経験し獲得できるようにすることが大切です。

提言1にチャレンジするためには

- 幼児が自分の興味や関心に応じて、体を動かす遊びを友達と繰り返し楽しめる環境づくりをしましょう。
- 園生活や遊びの中で経験している体の動きを捉え、発達段階に応じた基本的な運動の種類や、動きのパリエーションを経験できるように、体を動かす遊びや活動の指導を工夫しましょう。
- 体を動かす遊びや保護者参加の活動を指導計画にバランスよく位置付け、園の遊びや活動を通して幼児も保護者も体を動かす遊びや活動を十分に楽しめるようにしましょう。
- 保育者は、体を動かすことに関わる幼児の課題を解決するために、体を動かす遊びの指導や教材、環境の構成について園内外で研修し、実践に生かしましょう。

やってみよう!



提言2 幼児期に体を動かす経験の大切さを保護者と共有し、親子で触れ合い体を動かすことを楽しもう

利便性を求めた生活様式、幼児を取り巻く社会状況の変化等により、「子どもの体力・運動能力の向上」にふさわしい環境づくりが難しくなっています。園だけではなく、家庭で日常的にできる様々な体を動かす遊びや、生活の中で経験する体の動きを具体的に保護者に伝え、親子で触れ合い体を動かす機会の増加や、家庭での継続した機会となるように働き掛けていくことが大切です。

提言2にチャレンジするためには

- 園や家庭の生活の様々な場面で、幼児期に身に付けることが望まれる、歩く、走る、跳ぶなどの基本的な体の動きを親子で楽しみ、体を動かす心地よさを実感できるように、園と家庭で積極的な機会をつくりましょう。
- 片付けや掃除、階段の昇降等、日常の生活の中で経験している様々な体の動きや、それらの大切さについて具体的に保護者に知らせたり、各家庭での取り組みを保護者間で共有できるように工夫したりして、親子で触れ合い体を動かす家庭での経験が豊かになっていくようにしましょう。
- タオルやゴム、縄など、身近なものを使った親子での体を動かす遊びについて保護者に知らせる機会をもち、各家庭の生活の中で繰り返し楽しめるようにしましょう。



提言3 地域との関わりを広げ、親子で多様な体の動きができるように発信しよう

幼児は、園や家庭とともに、地域の人々や地域の環境との関わりの中で、心も体も健やかに育っていきます。地域の様々な行事や活動、環境を十分に生かし、地域と関わりながら親子で楽しく体を動かす経験をし、幼児の体の動きがより豊かになっていくように、園からの情報を発信していくことが大切です。

提言3にチャレンジするためには

- 地域の特性を生かし、地域の行事や活動、施設、広場、公園などの活用を通して、親子で体を動かす多様な経験ができるように、園行事を行う場所や活動の内容、活用の実際についての発信を工夫しましょう。
- 地域の行事や活動への参加を積極的に呼び掛けたり、参加により体験したことを園や家庭の遊びの中で再現したりできるようにしましょう。
- 保護者や地域の方と連携し、地域の様々な人と触れ合い、体を動かす多様な体験を親子で楽しむことができる機会をつくりましょう。



IV

提言の実践

3つの提言は、実践・行動化につなげていくことが重要です。各提言の実現に向けて取り組んだ実践や「親子で楽しくチャレンジ!」の実践について以下にまとめた。

全国の園や家庭・地域で、各提言の内容や実践例を参考にして、それぞれの実態に応じた取り組みをしていただけることを願っている。

1 実践について

実践1 提言1 多様な動きを引き出すために、遊びや環境を工夫しよう

「難しい…だから、楽しい!」

5歳児 10月

①運動会後の10月、幼児に体を動かす心地よさを十分味わってほしいと考え、ブランコの支柱に、新たな遊具「はしご」を取り付けた。取り組む際の目標となるよう、②はしごの段ごとに異なる色のカラービニールテープを巻き、ゴールにあたるブランコの支柱(横棒)にはイラストとすずをつけた。設置する際、はしごの下を固定しないのはしごが揺れて登りにくいのではないが、固定してしまうとジャングルジムと同じではないかと、保育者間で話し合い、まずは吊り下げる(固定しない)形で設置し様子を見ることにした。

取り組み始めは、はしごをつかむ力が弱く、はしごから落ちないようにはしごに肘をかけてしがみついたり、揺れるはしごの横棒を足(足の裏)で捉える感覚がつかめなかったりして、うまく登っていくことができなかった。保育者は、③はしごの揺れを抑えて幼児が登りやすいようにし、「次は、足を上の段に乗せてごらん」と腕と足の動きの順序を指示するなど、個々に合わせて補助した。繰り返し取り組みの中で次第に、はしごをしっかりつかみ、お腹に力を入れ自分に引き寄せるようにして次の段のはしごをつかむ、同時に足ははしごを探りながら上の段ののせ、腕と一緒に動かして体を引き上げるという動きができるようになった。また、上段のはしごをつかんでぶら下がる、はしごに座って揺れる等、様々な動きを楽しむようになった。苦戦しながら繰り返し取り組み幼児に「先生たちは、この(はしごが)揺れるのが難しいかな?って思ったんだけど、どう?」と尋ねると、「ゆらゆら揺れるのは難しいけど…だから楽しい!」「そうそう!」と答えが返ってきた。降園後の園庭開放でも繰り返し取り組み、④保護者に喜んで見せる姿が見られた。



指導のポイント

- ① 幼児が興味や関心をもって楽しむ中で、多様な動きを引き出せるよう園庭環境を見直す。
- ② 幼児が繰り返し挑戦する楽しさを味わえるよう、ビニールテープ・すず・イラストなど目印を付けるなどの工夫をする。
- ③ 取り組みの違いによる、一人一人の発達に応じた援助をする。
- ④ 園庭開放の際に、保護者に幼児の取り組みの様子や活動の意味を伝えていく。

考察

- ▶ 幼児の発達段階や時期を捉えて環境構成を工夫することが、幼児が体を動かして遊ぶことを繰り返し楽しむこと、多様な動きを引き出すことにつながる。
- ▶ 保育者は、遊びの中での幼児の体の動きを読み取り、不足している運動の種類や動きのパリエーションを引き出せるような視点をもつことが必要である。

実践2 提言2 親子で触れ合い、体を動かす大切さを保護者と共有しよう

「家でお母さんとやったよ」

5歳児 7月~9月

①幼稚園での幼児の様子を家庭に伝えるとともに、家庭での親子の触れ合い遊びを通して多様な動きが経験できる機会になることを願い、学級だよりに「親子でふれあいコーナー」という記事を毎回掲載している。

夏休み前は、親子向かい合ってしゃがみ、手のひらを合わせお互いに押し合って遊ぶ「しゃがみ相撲」などの遊び方を掲載した。

②学期が始まった最初の学級懇談会で夏休みの過ごし方などを話した際に、担任から学級だよりの記事「親子ふれあいコーナー」も話題にした。数人の保護者から「出掛けずに家で過ごしたときに、しゃがみ相撲をして遊びました。何回かやるうちに大人の私の方が負けちゃいました」「きょうだいで楽しんでいました。先生の話聞いて、我が子がやっていたことの意味が分かりました」と学級だよりの記事がきっかけとなり、家庭で触れ合い遊びをしたことの話があった。

③学級懇談会後のある日に、担任は学級全体で触れ合い遊びをしようとして「しゃがみ相撲」を行った。すると「これ、家でお母さんとやったよ」「寝る前に布団を敷いて家族みんなでやったことがある」と話す幼児がいた。また、幼児同士で好きな遊びのときなどに、「しゃがみ相撲しよう」と自分たちで遊び出す姿も見られた。

その後も継続的に学級だよりで様々な触れ合い遊びを紹介し、家庭での親子の触れ合い活動につながっている。



指導のポイント

- ① 家庭でできる体を動かす楽しい遊びを定期的に伝える。
- ② 伝えるだけでなく、その後の保護者の取り組みの様子を話題にするなど体を動かす大切さを共有する。
- ③ 家庭に伝えたことを学級全体でも遊ぶ機会を作り、家庭での遊びと園での取り組みをつなぐ。

考察

- ▶ 園から積極的に繰り返し親子が触れ合って遊べる遊びを伝えることは、家庭で触れ合いながら体を動かす機会につながる。
- ▶ 家庭に伝えたことを学級みんなの共通経験にすることで、家庭と園と連続性をもち、幼児が楽しく体を動かすことにつながる。

実践3 提言1・3 毎日、地域の広場で親子で体操しよう

「早起きして体操したんだ!」

4・5歳児 8月

地域には、開始70年目を迎える^①ラジオ体操発祥の公園があり、夏休みに入ると地域の数か所の公園で、小学生や幼児を連れた家族が集いラジオ体操を行っている。

前年度の5歳児学級担任は、夏季休業中の学級親子の参加の様子を見るため保護者から聞いた園に隣接した寺のラジオ体操の会場に行く。会場ではラジオ体操会の方々が生徒の前で立ち、ラジオから体操の曲を流れると、地域の方々に交じって、学級の5歳児も地域の方をしっかりと見ながらまねをして体を動かしている姿を見る。5歳児は、終業式後から数日経った今日までの出来事を明るい表情で話してくれた。そのことを、5歳児学級担任から報告を受けた園長は、翌日会場に行く。

会場にいる園長を見つけた4歳児は「おはよう!僕、早起きして体操に来たんだ」と気持ちよさそうな表情で話し掛けてきた。会場では^②親子が曲に合わせてのびのびと体操をしていた。

今年度、ラジオ体操発祥の公園がある地域のことを知らない保護者にも、登園すると見ることになっている^③掲示板や保護者会で、ラジオ体操が毎日行われていることを知らせた。ラジオ体操を行っている公園では、^④園児の親子が地域の方と挨拶を交わしたり、体操前のストレッチを一緒にしたりする光景があった。その中の親子1組は、夏休み以降もラジオ体操に通っていることを、ラジオ体操会の方から聞くことができた。



指導のポイント

- ① 地域の環境を活用して楽しく体を動かす。
- ② 親子で体を動かすことを継続的に実施する。
- ③ 地域で行われている体を動かす催しを知らせる。
- ④ 地域の方と触れ合う機会をつくる。

考察

- ▶ 地域に体を動かす活動があることを知らせ、その活動に参加することで、親子で体を動かす楽しさや行動化につながっている。園として地域での体を動かす活動や行事を発信することが必要である。
- ▶ ラジオ体操は毎日実施されており、毎日体を動かすことができている。
- ▶ 様々な体の部分を動かす体操は、多様な体の動きにつながり、幼児の成長の観点からも重要である。

実践4 提言3 近隣の広場や公園などの環境を活用して多様な体の動きを楽しもう!

「いつも遊んでいる公園でたくさん遊んで楽しかった!」 3歳児 10月

^①身近な公園の使い方や遊び方を知らせ、親子で体を動かして遊ぶことの楽しさを知らせることを目的に、地域の公園に3歳児の親子遠足を計画、実施した。この公園は、園から徒歩10分ほどの園区域内にあり、大きな築山、木の実がなる樹木、芝生広場、動物広場などが設置されていて、降園後、親子で友達と一緒にその公園で遊ぶことが多い。

親子遠足当日は、通常通り登園してから徒歩で公園に行き、保護者は園児を園に送った後、それぞれ公園に向かい合流した。

はじめに、^②親子で「なべなべそこぬけ」や「ひっつきもっつき」などの触れ合い遊びをした。最初は緊張している様子の保護者だったが、その後、親子で鬼遊びをするころには楽しそうに体を動かす、保護者の笑顔もたくさん見られた。こうして30分ほど親子での遊びを楽しんだ。

その後、公園で親子一緒に昼食をとり、食後には公園内の散歩、秋の自然物の収集などを楽しんだ。

実施後の感想には「いつも来ている公園もみんな来てるとまた違って楽しむことができた」「いつも来ている公園なのにいつもと違う遊びに夢中になる子どもの姿が新鮮だった」「最近子ども同士で遊んでいるのを見るが多かったので、親子で一緒に遊ぶのは久しぶりで楽しかった」「公園でこんなことができたのと再認識した」など、いろいろな感想があった。

^③後日、保護者からの感想を園だよりで紹介した。



指導のポイント

- ① 地域の公園を継続的に活用するきっかけづくりとして、近隣の公園や広場を活用しての親子遠足を実施する。
- ② 親子の触れ合い遊びや体を使った遊びを紹介し、体を動かす楽しさを実感できるようにする。
- ③ 積極的に近隣の公園や広場を活用した親子の触れ合い活動の取り組みの様子を掲示したり、園だよりで紹介したりして、親子活動の行動化を促す。

考察

- ▶ 園行事として、近隣の公園や広場などの園外に出掛けて、幼児が戸外で過ごす心地よさや楽しさ、親子で体を動かす楽しさを体験できるようにすることで、継続的に場を活用した親子遊びの展開が期待できる。また、そこで出会う様々な人と触れ合うきっかけとなる。
- ▶ いつも利用可能な公園や広場を活用し、体を動かす気持ちよさを味わうことができる活動を意図的に設定すること、また近隣の公園や広場を活用した親子の触れ合い活動での幼児の様子を園から発信することは、保護者の意識を高めることにつながる。

2 もっと体を動かそう!親子で一緒に楽しもう!「親子で楽しくチャレンジ!」の家庭での取り組み

幼児期に遊びや生活の中で多様に体を動かす体験を積み重ねることが、体力や運動能力の向上のために重要である。毎日の生活の中の少しの工夫で、親子で体を動かす活動を多様に行うことができる「親子で楽しくチャレンジ!」を作成した。

「親子で楽しくチャレンジ!」を活用して親子で一緒に楽しんで実践し、全国から寄せられた感想の一部を紹介する。

開いてみると...
「園庭や公園・広場でやってみよう!」のページ

さらに開いてみると...
園で遊ぶ日と休みの日と、親子で運動・休息・睡眠・食事のバランスを考えて、親子で楽しく体を動かす一日をデザインすることができる。

例示があったので、「こういうことをすることが大事なんだ」「こういうことでいいんだ」と、気持ちが楽になって楽しめた。

家の廊下で手押し車をするのが楽しんだ!

いつもやっていることだけれど、意識をしたら、楽しくて、気付いたら、いつも以上に子どもと一緒に遊んでいた。

- いつもやっていることを少し意識するだけなので、苦にすることなく、子どもと楽しみながら体を動かすことができた。
- 外に出られない日は子どもに運動させることができなかつた罪悪感のようなものを感じていたが、家で普通に遊んでいることやお手伝いしてくれていることが体を動かすことにつながるのだと分かり、とても気が楽になった。
- 「運動させなきゃ」と思っていたが、子どもとじゃれ合ったり、一緒に家のことをして、机を拭いたりと関わりながら普段していることが子どもの体を動かすことにつながるのだということが分かってうれしかった。
- 「親子で楽しくチャレンジ!」ができるとシールを貼るようになった。この取り組みを通して、「がんばったね」とか「荷物を持ってくれてありがとう」などと、子どもを褒めることが多くなった。
- 子どもから「親子で楽しくチャレンジ!」をやろうと誘われると「そうだね、やろう」と思うようになり、親子で会話をしたり、関わったりする時間が増えた。
- 家族誰とでも、いつでも楽しく体を動かして遊べるのが、子どもはうれしいようだ。家族みんなの関わりが増え、子どもが生き生きとするようになった。

3 提言の実践から明らかになったこと

幼稚園・こども園、家庭、地域に向けた3つの提言を基に行った実践や「親子で楽しく^{はなまる}チャレンジ！」の活用を通して、明らかになったことを以下にまとめる。

幼児は、園の遊びや生活の中で、様々な体を動かす経験をしている

幼児は、自ら環境に関わり楽しく夢中になって体を動かして遊ぶことで、様々な体の動きを経験するようになる。思わずやってみたくなるような遊びの経験や、個々の幼児の取り組みや発達段階に応じた環境構成・援助が、多様な動きを引き出されるために重要であることが(実践1)から読み取れる。そして、多様な動きの経験を積み重ねることによって、心身の健やかな発達が促され、さらに体を動かして遊ぶ意欲が育つ。幼稚園・こども園では、体を動かす機会を計画的・積極的につくり出したり、教材研究や研修により環境の構成や援助を工夫したりして、幼児がしたい遊びを十分に楽しみながら多様な動きを経験し獲得できるようにすることが大切である。

日常生活の中で、幼児の体を動かす経験の大切さを意識し、継続することが必要である

幼児は、幼稚園・こども園での運動的な遊びだけではなく、片付けや生き物の世話などの中で、遊具や用具を拭く・持つ・運ぶ・積むなどの動きを経験している。また、園庭の起伏や園の構築環境によって、坂や階段を登る・降りるといった動きや、活動によって座る・立つ・しゃがむなどの動きも日々繰り返している。そのことを保育者が意識した上で、さらに不足している動きや動きのパリエーションを引き出すことができるように保育を展開していくことが望まれる。リーフレット「親子で楽しく^{はなまる}チャレンジ！」では、運動場面のみを重視するのではなく、生活全般を通して体を動かす経験を続けて行うことの大切さを伝えていけるように、生活のデザインの仕方を紹介している。家庭生活の様々な場面で子どもたちが体を動かすチャンスがあることを保護者が実感し、園だけではなく家庭でのさらなる実践につなげていくようにすることも重要である。

親子で触れ合いながら一緒に体を動かす経験を楽しむことが、幼児の体を動かす機会の増大につながる

しゃがみ相撲(実践2)など、親子が触れ合うことで、幼児が大きな喜びを感じていることが読み取れる。そして、保護者も、幼児と触れ合うことや体を動かす楽しさを感じている様子がうかがえる。戸外や室内での様々な触れ合い遊びを紹介したリーフレット「親子で楽しく^{はなまる}チャレンジ！」の活用でも、触れ合い遊びを通して親子・家族で関わる機会が増えることにより、体を動かす楽しさの実感や体を動かす機会も増えていることが分かる。

また、園と家庭とが協力して「子どもたちの体力・運動能力の向上」に努めることが大切であることが(実践2)(実践4)から読み取れる。園での子どもたちの遊びや活動、行事、それらを通して経験している体の動きを家庭に発信し、発信したことが家庭での経験にどのように活かされているか、家庭からの情報を収集するなど、園と家庭との連携に努めたい。

地域の環境を生かし、地域との関わりを広げることが、子どもたちの健やかな育ちにつながる

地域の公園でのラジオ体操(実践3)では、地域の人と触れ合いながら様々な体の部分を使って体操することを楽しんでいる。また、地域の公園を利用した親子での園外保育(実践4)では、自然との関わりや親子での遊びを通して、地域の公園で遊ぶ楽しさを子どもだけではなく保護者が実感している。

園の環境だけではなく、園近隣の地域の環境を生かすことにより、幼児の体を動かす経験や、親子で体を動かす経験がより豊かになっていく。地域の環境の特徴や、遊び・活動・行事に生かすポイントを、園内で共通理解していくことが大切である。

V

2年次の全国キャンペーン・研修会

この全国キャンペーン・研修会は、親子の関わりを楽しみながら、幼児の体力・運動能力の向上を図るための環境を整え、実践化を図っていくことを目的とした取り組みである。



1 各ブロックの報告

福島県国公立幼稚園・こども園長会

① 東北 北海道ブロック

参加者 [計140名]

- 園児 51名
- 保護者 49名
- 未就園児 4名
- 園長 9名
- 教諭 20名
- 小学校関係 6名
- 教育委員会・行政 1名

実施日 平成30年10月13日(土) 会場 福島市 福島県青少年会館

親子で運動遊びを楽しもう!

受付	開会式	親子で運動遊びを楽しもう	閉会式
9:00	9:30	10:00	11:30 12:00

講師 東京都昭島市立光華小学校副校長 眞砂野 裕

じゃんけん遊び



眞砂野先生と幼児がじゃんけん、その後親子でじゃんけん。親子活動が子どもたちの笑顔で始まった。



動物の動きをまねて、じゃんけんゲーム。負けたら、動物になりきって勝った人の周りを一周した。

触れ合い遊び



保護者がバスになり、幼児が乗客で保護者の膝の上に乗る。坂道・くねくね道・がたがた道を走る。急カーブでは、子どもたちから歓声があがった。

参加者の声

- 楽しく遊ぶうちに、自然といろいろな動きができるような遊びを知ることができた。この遊びがどのような意味があるのか教えていただけなので、家庭でも意識してみようと思った。
- なかなか家庭ではできない運動遊びが楽しくできた。子どもがとっても楽しそうに伸び伸び行っていたので、本当に参加してよかった。
- 親子で触れ合い、体を動かす楽しさ、できた喜びを全身で表現する子どもの表情が印象的だった。保育にも取り入れていきたい。また、家庭へも働き掛けをしていきたい。

② 関東 甲信越ブロック

参加者 [計889名]

- 園児 230名 ●保護者 314名 ●園長 19名 ●教諭 49名
- コーチ 7名 ●教育委員会・行政 6名
- 見学者 264名 (大人84名・きょうだい180名)

実施日 平成30年11月24日(土) 会場:鹿嶋市 茨城県立カシマスタジアム

親子で楽しむボール遊び in カシマスタジアム

受付	開会式	鹿島アントラーズのコーチと体を動かそう!	閉会式
9:00	9:40	10:00	11:25 11:40

講師 鹿島アントラーズコーチ 古河 徳昭 他6名

親子触れ合いサーキット



障害物を乗り越えて、どっちが先にタッチできるかな?

気分はサッカー選手



子どもVS保護者 勝敗は…?

笑顔広がるスタジアム



あこがれのピッチから未来へはばたけ!

参加者の声

- 子どもたちの真剣な顔や楽しそうな顔をたくさん見ることができてよかった。何より親がとても楽しんでいた。日頃父親に遊んでもらえないので、子どももとても楽しかったようだ。
- 憧れのサッカースタジアムで、親子でボール遊びをした経験は一生の宝物だ。
- 一緒に楽しめる活動は親子の結び付きも強くなり、心身の発達にもよいことだと思った。今後とも親子で体を動かす楽しさを共感したい。

④ 近畿ブロック

参加者 [計445名]

- 園児 161名 ●保護者 157名 ●園長・教諭 101名
- 保育所関係 5名 ●教育委員会・行政 18名 ●その他 3名

実施日 平成30年11月17日(土) 会場:岸和田市 岸和田市総合体育館

もっと体を動かそう! 親子で一緒に楽しもう!

受付	開会式	親子で一緒に遊ぼう!	閉会式
9:00	9:30	10:00	11:20 11:30

講師 パワーアップスポーツ 代表者 小山 穰

よーい、どん!競走だ



だんじり祭りの大きなうちわにボールを乗せて競走する。

タオルで遊ぼう!



タオルでトンネルを作りくぐる。

パネルでポン!



パネルと同じポーズをまねる。

サーキットで遊ぼう!



岸和田祭りのだんじりの大屋根を作成し、その上を這っていく。

参加者の声

- 身近な物(タオルなど)を使って親子で楽しめる遊びを学べた。
- 発達段階による運動機能が表示されている手作りの表がとても分かりやすかった。
- 子どもの楽しそうな顔を見て、一緒に遊ぶことで子どもも親も癒されることを知り、これからは親子の時間を増やす努力をしたい。

③ 東海 北陸ブロック

参加者 [計203名]

- 園児 80名 ●保護者 82名 ●園長 12名 ●教諭 24名
- 教育委員会・行政 5名

実施日 平成30年11月6日(火) 会場:半田市 半田市立体育館

親子で遊ぼう 楽しく体を動かそう

受付	開会式	いつでも どこでも 親子で楽しく遊ぼう	閉会式
9:15	9:30	9:50	11:15 11:30

講師 中部学院大学 准教授 (株)ハドル・スポーツクラブ代表 平井 博史

おうちの人のひざに乗って



おうちの人のひざに乗って、バランスをとって遊んだ。日頃しない動きを親子で楽しんだ。

足の踏み合いっこ



素早く動く楽しさを味わった。

足にぎゅっとつかまって



落ちないようにおうちの人の足にしっかりとつかまった。

参加者の声

- 親子共に楽しかった。子どもはだんだん難しくなる動きをできるまで挑戦していた。
- 「楽しみながら運動すること」「子どもたちのやってみようという気持ち」が大切だと感じた。
- 道具を使わない遊びを親子でたくさん行った。家でも楽しく体を動かせると思った。

⑤ 中国ブロック

参加者 [計302名]

- 園児105名 ●保護者 105名 ●園長 60名 ●教諭 30名
- 教育委員会・行政 2名

実施日 平成30年11月17日(土) 会場:出雲市 島根県立浜山体育館カミアリーナ

親子で楽しい運動遊び in いずも

受付	開会式	親子で遊ぼう 触れ合い遊び	休憩	子:音楽に合わせて縄遊び 親:講演「幼児期の遊びと睡眠」	親子で遊ぼう 新聞紙を使って	閉会式
13:00	13:30	13:45	14:20	14:30	15:00	15:30 15:40

講師 からだ塾「I出雲」代表 木原 勇夫・木原 恭子

触れ合い遊び



お家の人の膝の上でバランスをとって飛行機発射。いろいろな触れ合い遊びを楽しんだ。

音楽に合わせて縄遊び



曲に合わせて楽しくジャンプ!縄遊びを通して隣の友達とも仲良しになった。

新聞紙で遊ぼう



ペラペラ新聞紙に変身して楽しんだ。

参加者の声

- この時期の運動遊びの大切さを再確認できてよかった。
- 遊びや運動が、身体や心の成長に大きくつながることを実感した。また、体を動かすことの大切さ、睡眠の大切さを痛感した。
- 幼児期の運動遊びや触れ合い遊びの大切さを実技と理論を通して実感できた。家族参加日に取り入れたい。

⑥ 四国ブロック

実施日 平成30年11月17日(土) 会場:善通寺市 善通寺市民体育館

参加者 [計321名]

- 園児 147名 ● 保護者 147名 ● 園長 21名
- 教育委員会・行政 2名 ● その他 4名



開会行事

親子で遊ぼう ボールでチャレンジ!

受付	開会式	様々なボール遊びを親子で楽しもう	閉会式
9:00	9:40	10:00	11:00 11:10

講師 元日本代表バレーボール選手 内藤 香菜子
(株)エール代表取締役 吉野 睦美

ボールの受け渡し



ボールでつながる親子の触れ合いの場になった。

巨大風船パレー



大きな風船ボールをボンボン! みんなで回して楽しんだ。

的あて遊び



「一歩踏み出して投げる」をやってみた。

参加者の声

- ボール1個あれば、家の中や家の前の小さなスペースでも体を動かすことができる。子どもと遊んでみようと思う。
- 親子で楽しく運動する機会があり、よかった。
- いろいろな運動が成長に必要な神経を作っていくことと、その大切さが分かった。

⑦ 九州ブロック

実施日 平成30年7月31日(火) 会場:鹿児島市 鹿児島大学教育学部附属幼稚園

参加者 [計119名]

- 園児 43名 ● 保護者 41名 ● 園長 10名 ● 教諭 24名
- 教育委員会・行政 1名

いっぱい遊び いっぱい楽しみ 体と心を動かそう

受付	開会式	親子でいっぱい遊び いっぱい楽しもう	閉会式
10:00	10:20	10:30	11:40 11:50

講師 日本レクリエーション協会認定インストラクター 杉山 幸美

じゃれつき遊び



親は手を離し、子どもは落ちないようにしっかり抱きついたり、「ムギュー」と抱きしめ合ったりして楽しんだ。

タオルを使って



子どもの足首を持って高く上げたり、膝の下を潜ったり、押し相撲をしたりして歓声をあげた。



綱引き、動物への変身ごっこ、そり、マントなど、バスタオル1本使って様々な遊びを楽しんだ。



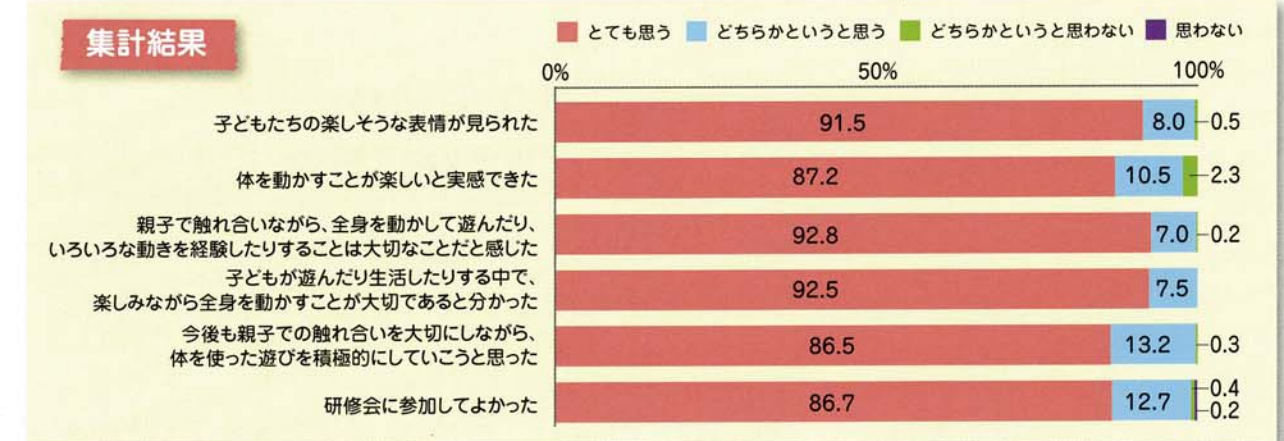
南日本新聞掲載
8月4日(金)

参加者の声

- 久しぶりに子どもと向き合って体を動かし、とても楽しく、触れ合うことの大切さを痛感した。
- 子どもがじゃれついてきても「忙しい」「後で」と断ってしまうので、反省し、触れ合う機会をつくらうと思った。
- 公園など行かなくてもタオルなどを使って遊べることを知った。子どもの笑顔がうれしかった。
- きょうだいがいる中で2人きりになる時間が取りにくい中、子どもと楽しい時間を過ごせた。

2 全国キャンペーン・研修会の成果

① 参加者アンケートの集計結果



7ブロックの全国キャンペーン・研修会の参加者アンケートを集計した結果、参加者が、幼児が遊びや生活の中で楽しみながら全身を動かすことが大切であることや親子で触れ合いながら全身を動かして遊ぶことやいろいろな体の動きを経験することが大切であると感じたことが分かった。また、保護者自身が体を動かすことが楽しいと実感したことや親子での触れ合いを大切にしながら、体を使った遊びを積極的にしていこうと思うきっかけになっていることが分かった。他にも、幼児たちの楽しそうな表情が見られた、参加してよかったという声も多数寄せられた。

② 集計結果から読み取れること

7ブロックでの全国キャンペーン・研修会の実施において、遊びや生活を通した親子の触れ合いを広げ「幼児の体力・運動能力を向上」させるための実践・行動化が促され、次のような成果があった。

全身を動かし親子で触れ合って楽しく遊ぶ中で、いろいろな体の動きを経験することができた

- タオルを使った綱引きや新聞紙を使ったごっこ遊びなど、身近にあるものを工夫して、親子と一緒に触れ合いながら様々な体の動きを楽しむことができた。
- 道具を使ったり、公園に出掛けたりしなくても、いつでもどこでもできる親子での触れ合い遊びを十分楽しむことができた。

保育者が、遊びや生活の中で、体を動かす遊びや活動を意図的・計画的に取り入れるきっかけになった

- 親子の触れ合い遊びの中に、体の育ちに大切な動きが含まれていることや日々の積み重ねが必要であることを保育者が再認識した。
- キャンペーン・研修会に参加し活動する幼児の表情から、親子の触れ合い遊びの大切さを知るとともに、活動に関する情報を保護者に発信していくことの必要性を感じた。

体を動かして遊ぶ楽しさを親子で共有し関わりを深めるとともに、取り組みを継続することへの意識につながった

- 保護者自身が体を動かす楽しさを味わうことができた。また、喜んで活動する我が子の姿に、親子と一緒に遊ぶ楽しさや、触れ合いの時間をもつ大切さへの理解を深めることができた。
- 幼児期の遊びや運動遊びの大切さを知り、家庭でも実践していこうと思う意識につながった。

親子で地域との関わりを広げ、地域の環境を生かそうとするきっかけになった

- 地域の人材を活用した活動に楽しく参加したことで、幼児や保護者と地域の人々との関わりや地域での保護者同士のつながりが広がった。
- 地域の環境や他園の取り組みなど様々な情報を知り、保護者自身が自分でもやってみようと思うきっかけとなった。

遊びや生活を通して、「子どもの体力・運動能力を向上」させるための幼稚園・こども園の役割

特別事業委員会 委員長 泉 雅美

幼児の心身の発達には適時性があり、体力・運動能力においても、幼児が遊びや生活の中で主体的に環境に関わることを通して育むことが重要である。幼稚園教育要領等では、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が示され、そのひとつに「健康な心と体」をあげている。

平成24年3月に文部科学省が「幼児期運動指針」を策定し、各園において幼児が意欲的に体を動かす遊びを取り入れたり親子で体を動かす機会を設けたりしてきたが、幼児を取り巻く環境や社会の変化は著しく、幼児期にふさわしい環境が整っているとは言い難い状況である。

本特別事業での調査研究の結果では、保護者が幼児の体を動かす遊びの大切さを理解しながらも、幼児の体力・運動能力向上に保護者の役割が大きいと考える保護者が10年前よりも一割減少した。しかし、平日は親子で触れ合って体を動かすことは少ないが、休日には公園などで体を動かして遊んでいる実態が分かった。そこで、遊びや生活を通して、子どもの体力・運動能力を向上させるための園の役割について考え、以下にまとめた。

幼児の遊びや生活を見直し、園や家庭や地域で幼児が多様な体の動きを、楽しく継続的に行えるようにすることが重要である。

◆ 保育者が幼児の体の動きを読み取ることから

幼児が体を動かす機会を意図的・計画的に行っている園が多くある。しかし例えば、幼児が鬼ごっこをしているときの「走る」動きのパリエーションの読み取りはどうであろう。鬼ごっこをしている場の広さや起伏などによっても「走る」動きのパリエーションは異なってくる。まず保育者が、遊びや生活の中で幼児が経験している運動の種類とパリエーションを読み取ることが必要である。そして、経験している少ない動きも捉え、幼児の興味や関心に応じて友達と繰り返し楽しめる環境を構成する。また、幼児の生活全般を通して、体の動きの種類とパリエーションを経験できるようにすることが重要である。預かり保育での遊びや生活においても、幼児の園生活として捉え、主体的に楽しみながら体を動かす工夫が必要である。

◆ 親子で体を動かし楽しむ動き掛けを

幼児にとって大好きな保護者と触れ合い楽しく過ごす心のつながりは、何よりの心の安定である。園行事などで親子と一緒に触れ合い体を動かす遊びの楽しさを経験することは、家庭でも親子で体を動かすきっかけとなる。本会の10年前の調査研究結果でも、親子で体を動かすことの継続が鍵であることが示されている。親子で手をつないで歩く、互いに背中を押し合う柔軟運動をするなど、親子で体を動かす楽しいヒントを、視覚的・体験的に家庭に働き掛けることが重要である。

◆ 地域の中で体を動かす行動化と継続化を

特別事業の全国キャンペーン・研修会に参加したことが、地域の広場や文化を知るきっかけとなり、地域を活用した親子での体を動かす行動化につながっている。また、親子で体を動かす遊びを子育て研修会後も続けている親子もいる。親子が地域の中で過ごす視点を持ち、園から親子で体を動かす遊びや生活の情報について発信し、行動化と継続化につなげることが重要である。

幼児期の体力・運動能力について / 親子で一緒に体を動かすことの重要性

東京学芸大学 教授 吉田 伊津美

◆ 幼児期の運動能力の現状

幼児の運動能力は、1990年代に低下が指摘されて以降、2016年に行われた全国規模の調査(森ら2018:図1)では、若干の向上傾向が見られる種目がある一方で(25m走、両足連続跳び越し)、やや低下傾向にある種目も見られています(立ち幅跳び、体支持持続時間)。2012年には幼児期運動指針(文部科学省2012)が策定されましたが、その後幼児の運動能力については、顕著な改善が見られているとは言えません。

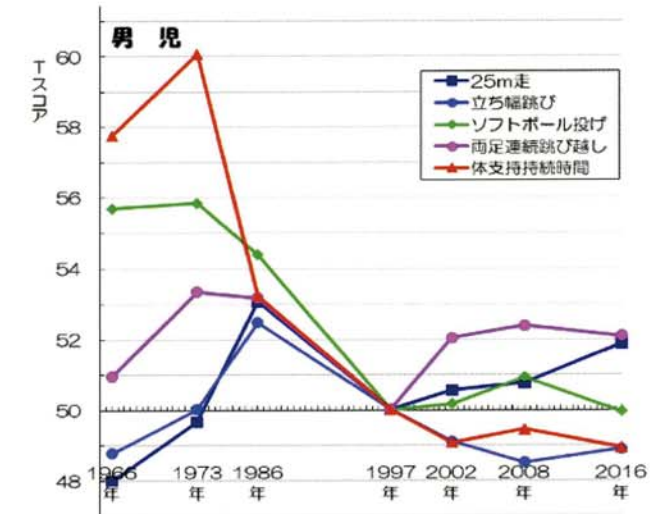


図1. 幼児の運動能力の時代推移 (森ら2018より作成) 1997年を基準にTスコアで示した

◆ 幼児期の運動発達・運動経験のあり方

幼児期は神経系の発達が著しいことから、いろいろな種類の動きが身に付きやすいという特徴があります。動きはその動きの経験によって獲得されるため、いろいろな動きを身に付けるためには、いろいろな動きの経験が必要になります。それを保障するのが「遊びとして行う運動(運動遊び)」です。

杉原(2014)は保育に役立つ考え方として、遊びを「自己決定と有能さの認知を追求するために内発的に動機づけられた状態」としています。遊びをこのように捉えると、行動における「子どもの自己決定」が遊び要素になります。すなわち、何をやるか、どう行おうか、きまりはどうするかなど、大人が指示してやらせるのではなく、子ども自身が考えて取り組むようにすることが遊びを指導することになるのです。

◆ 幼児期の遊びとして行う運動の意義

幼児期の運動遊びは、体力や運動能力を高めるためだけに必要なものではありません。もちろん、体を動かすことで身体諸機能の発達が促されるだけでなく、いろいろな動きが身に付きます。このことは、自分の体の動きを調整できることでもあり、子どもの安全能力(けがや事故に対応する力)を育てることにともないます。しかし、幼児期の運動遊びは体の育ちだけに関係しているわけではありません。

幼児期の運動遊びは、有能感を中心とする自己肯定感や意欲、協調性、粘り強さなど非認知的能力(学びに向かう力)とも密接に関連しています。運動能力が低いということは運動遊びの経験が少ないということですが、運動遊びの経験が少ないということは、このような心の育ちが十分に保障されていない可能性があるということなのです。

◆ 幼児の運動参加に関わる保護者の影響

幼児の運動遊びへの関わりには、保護者がもっている価値や期待が関係しているとされます。保護者は自分が高い価値を置く領域に早期から子どもを導き、支援し、そこでの子どもの成功を期待します。また子どももその領域において保護者がもつ信念を内在化し、その活動を長く続けるようになります。つまり保護者が運動遊びに好意的か否定的か、高い価値を置くか置かないかで、子どもの運動遊びへの参加が異なってくるのです。

◆ 親子で一緒に体を動かすことの重要性

幼児期は、友達など同年代の仲間よりも保護者の影響が大きいとされています。これは多くの時間を家族と過ごしていたり、十分な役割取得能力を発達させておらず、保護者や大人のフィードバックに強く依存していることなどからです。そのため、まずは親と一緒に動くことの子どもの影響は大きいと言えます。子どもにとって保護者と一緒に何かができることは楽しいことです。運動というと上手下手やできるできないが目立ちがちですが、何か上手にできることよりも一緒に動いて「楽しい」という経験が大切です。楽しいことはまたやりたくなります。子どもが体を動かすことに保護者が肯定的に関わり、それを子どもが自覚するとき、子どもは楽しさを認識します。保護者が子どもと一緒に、または一緒に動けなくても受容的・肯定的に関わることは、子どもの運動への関わりを促進していくことになるのです。

◆ 日常的に親子で一緒に体を動かす

体を動かすというと、運動やスポーツをイメージしますが、人間は毎日、日常的に体を動かしています。幼児期運動指針(文部科学省 2012)でも「体を動かすことには、散歩や手伝いなど生活の中での様々な動きを含めます」とあります。買い物やお手伝いなど、身近なところにある体を動かす機会を見直すことで、特別なことを行わなくても、普段から「親子で一緒に体を動かす」ことはできるのです。

◆ 園の役割～保護者との連携と子育ての支援

「保護者との連携」と「子育ての支援」はつながっているように思えますが、幼稚園教育要領等では「連携」と「支援」は分けて考えられています(無藤 2017)。

「連携」は相互の助け合い、協力であり、「支援」は家庭での子育てに対する手助けです。「体を動かすこと」についてそれぞれ考えてみると、「連携」については、体を動かすことについて園の方針や園での取り組みを理解してもらったり、園だけでなく家庭でも体を動かすよう双方で一緒に取り組んだり、一日の生活の流れを考慮し子どもの活動を考えてみたりすることなどが考えられます。また「支援」については、運動遊びの意義を伝えたり、体を動かす機会や情報の提供をしたり、保護者同士が話し合いや情報交換する場を設けたり、保護者の悩みを聞いたりなどがあげられます。これらを通して体を動かすことだけでなく、保護者の幼児教育に関する理解が深まるようにすることで、園と一緒に子どもを育てるという保護者の意識を高めていくことが大切であると言えます。

編集・執筆 特別事業委員

【平成29年度】

委員長	泉 雅美	文京区立青柳幼稚園
副委員長	加納千恵子	浦安市立美浜南認定こども園
委員	山口 晃司	中央区立有馬幼稚園
委員	足立 祐子	台東区立大正幼稚園
委員	島崎 智恵	認定こども園世田谷区立多聞幼稚園
委員	高梨 智子	浦安市立日の出幼稚園
委員	青山 伸子	港区立港南幼稚園
国公幼会長	関 美津子	練馬区立北大泉幼稚園
同副会長	新山 裕之	港区立青南幼稚園
同事務局長	佐藤 忍	国公幼事務局

【平成30年度】

委員長	泉 雅美	文京区立青柳幼稚園
副委員長	加納千恵子	浦安市立美浜南認定こども園
委員	山口 晃司	中央区立豊海幼稚園
委員	足立 祐子	台東区立竹町幼稚園
委員	島崎 智恵	認定こども園世田谷区立多聞幼稚園
委員	高梨 智子	浦安市立日の出幼稚園
委員	青山 伸子	港区立港南幼稚園
国公幼前会長	関 美津子	練馬区立北大泉幼稚園
国公幼会長	新山 裕之	港区立青南幼稚園
同副会長	箕輪 恵美	中央区立有馬幼稚園
同事務局長	佐藤 忍	国公幼事務局

平成 30 年度 全国ブロックキャンペーン・研修会ブロック担当

東北 北海道	石川 逸子	福島市立おどり幼稚園
関東 甲信越	高野 照代	行方市立玉造幼稚園
東海 北陸	竹内 由紀	半田市立宮池幼稚園
近畿	永野 正代	岸和田市立岸城幼稚園
中国	鐘築 邦子	出雲市立四絡幼稚園
四国	梶 裕美	宇多津町立宇多津幼稚園
九州	石原 義仁	鹿児島市立宮川幼稚園

遊びや生活を通して、子どもの体力・運動能力を向上させる調査研究報告書Ⅱ もっと体を動かそう! 親子で一緒に楽しもう!

発行日	平成 31 年 3 月 1 日
編集発行	全国国公立幼稚園・こども園長会 会長 新山 裕之
住所	〒113-0034 東京都文京区湯島 1-5-28 ナーベルお茶の水 208
電話	03-5684-2240
F A X	03-5684-2174
Eメール	entyoukai@kokkoyo.com
ホームページ	https://kokkoyo.com